

小児看護学実習において母親との関係形成のために看護学生がとる行動の実態

合田 友美¹, 阿部 裕美², 佐藤佳代子²

The Actual Situation of the Actions that Nursing Students Take to Form Relationships with Hospitalized Children's Mothers in Pediatric Nursing Practice

Tomomi GODA¹, Hiromi ABE² and Kayoko SATO²

キーワード：小児看護学実習，看護学生，母親，関係形成，行動

概 要

本研究の目的は、小児看護学実習において看護学生が受け持ち患児の母親との関係形成のために心がけている行動の実態を明らかにすることである。そこで、看護学生がとる行動に焦点をあて、内容の類似性からカテゴリー化を行った。その結果、125コード、17サブカテゴリーから【母親の疲労に対する援助を行う】【母親とコミュニケーションを図る】【礼儀・マナーを守る】【患児に関心を示す】【看護技術・知識を提供する】の5カテゴリーが抽出された。看護学生は患児や母親との対話を大切にしながらも母親の意思を尊重するなど支持的態度を示したり、母親の心身の疲労を軽減したりするための援助を行うことが母親からの信頼を得るきっかけになると捉え行動していた。さらに、礼節をわきまえながら患児およびその母親と積極的に関わろうと努力し、学生として看護の専門的知識や技術を提供することを心がけていることが明らかとなった。

1. 緒 言

小児看護の対象は子どもとその家族であり、看護者は患児の援助をするために、子どもに付き添う母親と協力関係を維持する必要がある¹⁾。しかし、核家族化や少子化の中で育った現代の看護学生は対人関係の幅が狭く、小児看護学実習において子どもとの関わり方だけでなくその家族とどのように関わればよいのかという戸惑いを抱くことが多い。

先行研究^{2,3)}では、臨地実習において看護学生（以下、学生とする）は母親との対応にストレスを感じやすく、受け持ち当初、患児の母親との関係に不安を持ちやすいことが指摘されている。一方で、学生は積極的に母親と関わることで母親への思いを変化させることも報告されている⁴⁾。このように、学生と家族の関係が看護実践や学習成果に相互に影響することを鑑み

ると、学生が受け持ち患児の家族と良好な関係を形成するために意識的に心がけている行動の実態を知り、学生が看護援助を積極的に実践できるよう教育的に支援することが重要である。

このことから、筆者らは先に短期入院の多い病棟で小児看護学実習を行った学生が、受け持ち患児の母親と関わりの中で困惑した内容を明らかにし、学生と母親との関係形成を促すための支援方法を提案した⁵⁾。そこで、今回は、小児看護学臨地実習において学生が母親との関係を形成するために心がけた行動に焦点を当て、その実態を明らかにすることを目的とした。

2. 小児看護学実習の概要

A短期大学看護科における小児看護学実習は2週間2単位の实習であり、3年次前期に開講されている。本研究は、この小児看護学実習のうち小児病棟で実習する5日間の学生の行動に焦点を当てている（図1）。小児病棟実習において学生は1人の受け持ち患児を受け持って看護を展開し、患児に付添う家族とも援助的人間関係を築きながら小児看護学の実際を学ぶ。受け持ち対象児は病棟師長および教員が選定し、その中から学生自身の実習目標に合った受け持ち患児1名を選

（平成24年11月19日受理）

¹香川県立保健医療大学 看護学科

²川崎医療短期大学 看護科

¹Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

²Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

グループ/期間	月	[1週目]				[2週目]				
		火	水	木	金	月	火	水	木	金
Aグループ (6名)	オリエンテーション	病棟実習*				外来実習		NICU実習	学内カンファレンス	
Bグループ (6名)		外来実習		NICU実習	学内カンファレンス	病棟実習*				

*は本研究対象とした実習期間

図1 小児看護学実習計画

んでいる。小児病棟実習での1グループの学生数は6名で、原則として専任教員が常駐し実習指導者(受け持ち患児を担当している看護師)と協働して学生の指導に当たっている。

3. 研究方法

1) 調査対象

A短期大学看護科に在籍する学生のうち、2009年度開講の小児看護学実習を履修した3年生103名。

2) 調査期間

小児看護学実習終了後の2009年10月21日～28日。

3) 調査方法・内容

無記名の自記式質問紙調査法。主な質問の内容は、

①受け持ち患児の背景(年齢、性別、疾患名)、②受け持ち期間、③受け持ち患児の母親との関係形成のために心がけた行動とし、自由に記述してもらった。

4) データの収集と分析方法

冒頭に研究者が研究調査の趣旨を説明して一斉に質問紙を配布し、後日、所定の場所に投函してもらった。分析方法として、受け持ち患児の背景および受け持ち期間については単純集計をおこなった。また、受け持ち患児の母親との関係形成のために心がけた行動については、行動の内容に焦点をあてて一文章一意味でセンテンスを抽出・整理しコード化して、カテゴリーとサブカテゴリーに分類した。なお、データの分析過程においては信頼性と妥当性を高めるために、繰り返し3人の研究者が協議し検討を重ねた。

5) 倫理的配慮

倫理的配慮として、①本研究の目的・方法と②研究協力は自由意志によるもので拒否や中止、中断が可能であること、③無記名であり個人は特定されないこと、④研究への参加・不参加は小児看護学の成績に影響しないこと、⑤研究終了後、記録データはすべてシュレッダー等で粉碎処理すること、⑥研究の成果は看護関連の学会等で発表予定であることの6点を文章および

口頭で説明し、質問紙の提出をもって同意を得たこととした。

4. 結果および考察

同意が得られた86名から質問紙を回収し(回収率83.5%)、受け持ち患児の母親との関係形成のために心がけた行動について77名の記述があった。この77名の学生の受け持ち患児の背景を年齢別にみると0歳児が17名(22.1%)を占めて最も多く、年齢幅は0歳2か月から13歳であり、全体の約6割の学生が幼児を受け持っていた(図2)。また、性別では男児が45名(58.4%)、女児が32名(41.6%)で男児の方が多かった。さらに、受け持ち患児の主な疾患名は表1に示す通りであり、全33種類のうち、口唇口蓋裂が19名(24.7%)と最も多く、次いで肺炎が10名(13.0%)と、手術を受ける患児や急性期の患児を受け持つ学生が多かった。受け持ち期間の平均日数は、 4.01 ± 0.90 日であった。

77名の記述から125の意味項目を抽出し、17サブカテゴリーから【母親の疲労に対する援助を行う】【母親とコミュニケーションを図る】【礼儀・マナーを守る】【患児に関心を示す】【看護技術・知識を提供する】の

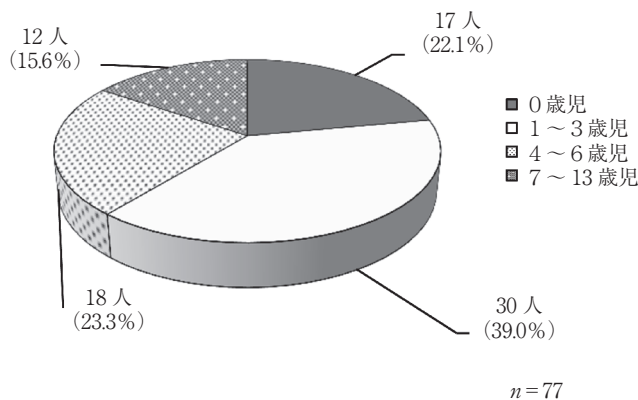


図2 受け持ち患児の年齢区分

表1 受け持ち患児の主な疾患とその人数

n = 77

疾患名	人 (%)
口唇口蓋裂	19 (24.7)
肺炎, 気管支炎	10 (13.0)
漏斗胸	6 (7.8)
気管支喘息	5 (6.5)
髄膜炎	3 (3.9)
鼠径ヘルニア	3 (3.9)
川崎病	2 (2.6)
熱 傷	2 (2.6)
てんかん	2 (2.6)
睡眠時無呼吸症候群	2 (2.6)
その他 (23種)	23 (29.8)

表2 母親との関係形成のために看護学生が心がけた行動とコード数

n = 77, 125コード

カテゴリー	サブカテゴリー
母親の疲労に対する援助を行う (54)	母親の訴えを傾聴する (23)
	母親の休息時間を作る (15)
	母親の健康状態を気づかう (7)
	母親をねぎらう (5)
	共感的態度を示す (2)
	母親に承認を与える (1)
	母親を尊重する (1)
母親とコミュニケーションを図る (33)	母親とすすんでコミュニケーションを図る (33)
礼儀・マナーを守る (18)	言葉づかいや態度に留意する (12)
	挨拶をする (4)
	笑顔で接する (2)
患児に関心を示す (11)	患児へ声かけをする (4)
	患児と積極的に関わる (3)
	患児に関心を示す (2)
	訪室回数を増やす (2)
看護技術・知識を提供する (9)	質問や要望に対応する (7)
	看護技術を提供する (2)

() はコード数を表す

5つのカテゴリーが抽出された(表2)。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、具体的な記述内容は〈 〉で示す。なお、分かりにくい箇所には前後の文脈から()内に言葉を補った。

1) 【母親の疲労に対する援助を行う】

このカテゴリーは最もコード数が多く、《母親の訴え

を傾聴する》《母親の休息時間を作る》《母親の健康状態を気づかう》《母親をねぎらう》《共感的態度を示す》《母親に承認を与える》《母親を尊重する》の7つのサブカテゴリーで構成されていた。

多くの学生は、積極的に《母親の訴えを傾聴》し《共感的態度を示す》ように努め、《母親の健康状態を気づかう》声かけを行ったり、〈患児の世話を学生がすることで母親が休息をとれるように工夫〉したりしていた。また、常に患児に寄り添う〈母親の頑張りを認め〉ながら、《母親に承認を与え》たり《母親をねぎらう》よう心がけていた。先行研究⁵⁾において、看護学生は、患児の病状が安定せず母親の不安やストレスが高まり、母親が不機嫌な態度を示していることや母親の疲労が重なり暗い表情をしていることなど、母親の変化からその疲労をしっかりと感じとっていることが報告されている。本研究結果から、学生は、患児だけでなくその母親も小児看護の対象であることをしっかりと認知し、母親の疲労への気づきに留まらず、必要な援助内容を捉えて看護を提供していることが明らかとなった。

さらに、母親を〈親や人生の先輩として敬う気持ちをもち〉ながら〈母親の子育て方法について話を聞き〉、《母親を尊重する》ことを忘れずに援助する姿勢を大切にしていた。

水畑⁶⁾は、患者の疾患・症状・問題点ではなく、その人そのものに対する「関心」をもつことが「気づかい」をもたらし、働きかけがその後の人間関係を発展させることにつながると述べている。つまり、良い人間関係を築きたいと願う学生の患児と母親への「関心」が、看護の対象となる「事例としての関心」だけでなく「人間としての関心」へ移行することで母親の疲労に対する「気づかい」が生まれ、このような学生の視点が学生と母親との関係形成を促す要因の一つになり得ると考えられた。

2) 【母親とコミュニケーションを図る】

このカテゴリーは、33のコードから《母親とすすんでコミュニケーションを図る》の1つのサブカテゴリーで構成されており、多くの学生が、少しでも母親の思いを知り看護援助につなげたいと考えて、すすんで《母親とコミュニケーション》を図っていることが明らかとなった。すでに、受け持ち患児の家族との距離感が接近した学生は家族との関わり時間が長いことが報告されており⁷⁾、訪室回数を増やしながらか《母親とすすんでコミュニケーションを図る》という行為は、

母親との関係形成において有用であると考えられる。ただし、看護学生は、母親と会話を始めるきっかけが分からず不安な思いを抱いたり、母親との会話が途切れ沈黙が続くことに戸惑ったりしやすい⁵⁾。そのため、教員は、現代における看護学生のコミュニケーション能力の未熟さを念頭に置きながら、学生の不要なストレスを軽減し学生の積極的な関わりを支援する配慮が必要であると考えられる。

3) 【礼儀・マナーを守る】

このカテゴリーは、《言葉づかいや態度に留意する》《挨拶をする》《笑顔で接する》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

学生は、《言葉づかい・態度》や《挨拶》を礼儀やマナーとして踏まえておくべき最低限の社会的ルールと認識し、これらを母親との関係形成のための基本的態度と考え遵守していた。看護学生の訪問時のマナーの認識度は言葉づかいや挨拶で高く、身だしなみや笑顔で低いことが報告⁸⁾されているが、小児看護学実習では、特に患児との関係づくりにおいて安心感を与えるために表情(笑顔)がとても重要となる。そのため、本研究の対象学生はこの特徴を踏まえて《言葉づかい・態度》や《挨拶》に加え、患児や母親に《笑顔で接する》ことを心がけて行動していたのではないかと推察された。

4) 【患児に関心を示す】

このカテゴリーは、《患児へ声かけをする》《患児と積極的に関わる》《患児に関心を示す》《訪室回数を増やす》の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

学生は《患児への声かけ》だけでなく、母親との会話の中で《患児の好きなものについて話を聞く》機会を持つなど、《患児への関心》を示す配慮をしていた。また、学生は《患児と積極的に遊ぶ》ことや《すすんで患児を抱く》ことを意識して、患児との信頼関係の構築を目指しつつ母親に《患児と積極的に関わる》姿勢を示していた。そして、意識的に《訪室回数を増やす》ことで、変化しやすい患児の全身状態を細かく把握しようとする姿勢を示し、学生が患児に心を寄せていることを行動で表していた。さらに、子どもの病状を心配する母親の姿を敏感に捉えながら、それに応えることで母親の信頼を得ようとしていることが窺えた。加えて、《患児へ声かけをする》ことや《訪室回数を増やす》ことによって、患児がより早く学生の存在を認識できるように心がけていた可能性も考えられる。

長瀬²⁾は、看護学生と患児との関係が進展するに

つれ母親との関係も良好となると述べている。これより、本研究の対象学生が受け持ち患児に声をかけ、遊びを提供したりスキンシップを図ったりしながら患児との距離を縮め関係を進展させようとした行動は、母親との関係形成において有効な手段であったと考えられる。

5) 【看護技術・知識を提供する】

このカテゴリーは、《質問や要望に対応する》《看護技術を提供する》のサブカテゴリーで構成されており、最もコード数が少なかった。

学生は、《母親からの質問や要望に必ず対応する》ために《自分で調べられることは調べたり聞いたりして(母親へ)伝える》ように努め、《患児の疾患についての専門知識を説明》するなど《丁寧に質問に対応》していた。そして、患児の健康問題を改善させるとともに母親との関係形成を促進させることを狙って、患児に必要な《看護技術を提供》していることが明らかとなった。

このような場面において学生と患児および母親の関係は、《看護技術を提供》したり《質問や要望に対応》したりする専門家と専門家の支援を必要とする健康障害を抱えた人という立場にある。しかしながら、実際は小児看護に関する知識と看護技術の不足から、不安を抱きつつ実習に臨んでいる学生も多く、先行研究⁵⁾では、母親の知識の豊富さから質問に対する対応の難しさを経験する学生の存在が明らかになっている。さらに、細谷⁹⁾は、母親が学生の対象理解の不十分さや援助技術の未熟さに関連して不安を抱いていることを明らかにしている。そして、このことがコード数の少なさに関係していると推察できる。

そこで、教員は、学生が机上の学習と患児の病状を結びつけ統合できるよう誘導し、学生が萎縮したり劣等感を抱いたりすることなく適切な看護援助を考えてスムーズに看護技術や知識を提供できるように教育的な支援を行うことが重要であると考えた。

5. 結 論

小児看護学実習において、多くの看護学生は患児や母親との対話を大切にしながらも母親の意思を尊重するなど支持的態度を示したり、母親の疲労に伴う心身の負担を軽減したりするための援助が、母親からの信頼を得るきっかけとなると捉え行動していた。また、受け持ち患児の母親との関係を形成するために礼節をわきまえながら患児および母親と積極的に関わり、看

護学生として看護の専門的知識や技術を提供しようと心がけて行動していることが明らかになった。さらに、学生が母親を「気づかう」行動は、学生が受け持ち患児の母親とより良い人間関係を構築するための一つの要因となる可能性が示唆された。

調査を重ね、受け持ち初日から最終日までの学生と母親との関係形成のプロセスを捉えることで、経時的な教育支援方法を見出すことが今後の課題である。

6. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました学生の皆様に心から感謝いたします。

なお、本研究は第10回国際家族看護学会学術集会において報告したものに、一部加筆・修正を加えたものである。

7. 文 献

- 1) 藤井裕治, 本郷輝明:【変容する家族と小児病棟の現在】小児病棟の現状, さらに増してきた看護の重要性, 看護教育41(6):423-427, 2000.
- 2) 長瀬玲子:小児看護学実習を行う看護学生のストレスと兄に付き添う母親のストレスとの関係—学生と母親への関わりに対する考察—, 日本小児看護学会学術集会講演集11回:118-119, 2001.
- 3) 鮫島陽子, 加藤暢世, 江口八代美, 森島ゆり, 齊藤広美:病児の付添いに対する看護学生の思いと学びの実態—学生へのアンケート調査から, 看護教育44(8):706-710, 2003.
- 4) 大見サキエ, 川出富貴子, 岩瀬貴美子, 臼井徳子, 鍵小野美和:看護学生が抱く入院患児の母親への「思い」—母親との関係形成支援のために—, 日本小児看護学会誌14(2):71-76, 2005.
- 5) 阿部裕美, 佐藤佳代子, 合田友美:看護学生と受持ち患児の母親との関係形成に向けた効果的支援の検討—母親とのかかわりの中で困惑した場面に焦点を当てて—, 川崎医療短期大学紀要31:21-26, 2011.
- 6) 水畑美穂, 菊井和子:臨床実習における学生と患者の人間関係形成におけるプロセス—ベナー及びワトソン理論による分析, 川崎医療福祉学会誌15(1):149-159, 2005.
- 7) 藤田千春, 永田真弓, 広瀬幸美:小児看護学実習における受持ち児の家族と学生の心理的距離の変化, 横浜看護学雑誌3(1):32-38, 2010.
- 8) 藤田京子, 五十嵐依子, 高橋明美, 小暮智子, 瀬谷恵美:看護学生における訪問マナーの認識度—訪問マナーの教育内容と教授方法—, 日本看護学会論文集—地域看護37:117-119, 2007.
- 9) 細谷京子, 渡辺美穂, 生須典子, 真下茂美:小児看護学実習における学生の受け持ち患児および家族に及ぼす影響, 群馬県立医療短期大学紀要11:79-89, 2004.

